

## II 重点項目別の成果と課題

### 使命1 地域の人びとと地域活性化に取り組み、ともに成長するミュージアム

基本方針	活動目標	重点項目	成果の概要	課題及び改善への取り組み
県民との協働や地域活性化への貢献	地域や県民などとの協働	1. 地域の文化資源の掘り起こし・磨き上げ・活用	<p>(1) 地域にある文化資源の把握、掘り起こし状況</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域資料の所在把握 多度津町（合田邸）地券データ整理</li> <li>年間12日間（月1回程度、1～2名）合田邸ファンクラブとともに取り組んだ。</li> <li>合田家の経済基盤となる土地状況を把握する基礎データを構築、今後の研究・分析への活用が期待できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・県内の地域文化資源については、まだまだ把握が十分でなく、一層拡充する必要がある。</li> <li>・中長期計画を策定し、地域へ外向く頻度を高め、文化資源の情報を増やしていく必要がある。</li> </ul>
			<p>(2) 地域の人びととのつながりと協働</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ミュージアム・ボランティア活動</li> <li>登録人数90名（令和元年度新規応募18名）</li> <li>全体活動</li> <li>特別展関連ワークショップ補助 のべ11日間</li> <li>全体会の開催（20名参加）</li> <li>活動報告展示（令和2.2.18～3.22）</li> <li>グループ別活動</li> <li>解説 年間73回、のべ165人</li> <li>ギャラリー・トーク 年間19日、のべ38名</li> <li>普及 自主運営ワークショップ 年間3回実施</li> <li>資料整理 チラシ・図書整理等 年間17日、のべ93名</li> <li>瀬戸内海歴史民俗資料館 年間236回、のべ339名</li> <li>（展示案内・資料整理・館外調査・館行事補助他・環境整備）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・若年層のボランティアが少なく、高校生・大学生への周知や、学生が参加しやすい活動内容等について検討を進めていく。</li> </ul>
			<p>(3) 文化資源の活用とそれを担う人材について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・豊島小中学校に保管されていた「昔の道具」を現地で展示し児童・生徒、観光協会職員を対象とした解説会を開催したり瀬戸内国際芸術祭の来島者の観覧に供した。</li> <li>（前年度までの調査成果をもとに実施）</li> <li>企画：歴民 運営：歴民・ミュージアム・ボランティア</li> <li>展示日数9日（R1.10.26～11.4） 展示84点</li> <li>来場者 471名</li> <li>豊島を歩くワークショップ開催 13名参加【歴民】</li> <li>豊島観光協会との勉強会 18名参加【歴民】</li> <li>豊島小学校連携授業 8名（小3・4年生）【歴民】</li> <li>※連携授業では地元の方2名も講師となる</li> <li>・香川県中学校美術教育研究会と連携し、かがわ未来のアーティスト育成事業を実施した。瀬戸内国際芸術祭2019のプログラムとして、中学校美術部員が県伝統工芸士の指導を受けて鬼瓦を制作し、女木島での展示やワークショップを実施した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今後も地域に埋もれた資料の掘り起こしと地元での活用・啓発に、地域と連携して取り組む必要がある。</li> <li>・中学生が香川の文化に触れ、ミュージアムとも接点を持つ機会になることから、今後も連携を継続していく。</li> </ul>

			<p>(4) 文化財レスキューなどのネットワークづくりの状況</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本館および分館、生涯学習・文化財課、埋蔵文化財センターの担当職員が月1回程度集まり、地域の文化資源の保全・活用に関する情報・意見交換を行った。</li> <li>・被災地域への救済資材の援助として、裁断新聞紙の作成・送付を行った。</li> <li>・(公財)日本博物館協会などと連携し、被災文化財の救済方法に関するワークショップを開催した。 2日間 (R2. 2. 18~19) 県内21館32名参加 ※香川県資料館協議会加盟館、市町文化財担当部局、美術館、文書館の職員が参加</li> <li>・奈良大学文化財学科魚島純一教授と協力し、ビニール製保存袋を利用した資料保存方法のデータ採取を観音寺市ふるさと学芸館、多度津町合田邸で行った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関連機関の情報共有のため、今後も継続していく。</li> <li>・今後も被災地域の情報を収集、要望を聞きながら、県外の被災資料のレスキュー活動を支援していく。</li> <li>・実際の作業を通じて被災資料の救出方法を学ぶ機会となり、参加者に好評だった。今後も継続して実施し、救出方法を幅広く共有する機会を設けるとともに、災害時のレスキューを行うためのネットワークの構築につなげていく。</li> <li>・収蔵環境を整えることが困難な場所でも、一定の安全な環境を創出できる技術であることから、積極的に協力し、必要な保存場所への情報提供を行う。</li> </ul>
--	--	--	--	--

使命2 香川の文化創造に寄与し、豊かな社会を実現する原動力となるミュージアム

基本方針	活動目標	重点項目	成果の概要	課題及び改善への取り組み
文化資源の収集	収蔵品の充実	2. 収集方針に沿った能動的収集	<p>(1) 収集実績</p> <p>【本館】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>石井馨堂「堆朱硯箱」（高松松平家伝来の作品）、小林萬吾関連書簡・写真等を含む518点を収集。</li> </ul> <p>【歴民】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>民俗及び瀬戸内海海事関係資料など89点、及び魚の剥製、漁具模型などの資料5点を収集。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>貴重な資料を収集することができた。今後も、平成30年度に策定した収集方針に基づいて、計画的な収集が出来るように努める。</li> <li>能動収集により、既存資料の空白を埋めたり、資料研究を推進していく必要がある。</li> </ul>
		<p>(2) 新規収蔵品や預託(収集予定)資料に関する調査研究</p> <p>【本館】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>収集した小林萬吾関係書簡や写真の調査を行い、令和2年度春の特別展「白馬のゆくえ」の図録でその成果を公表した。</li> <li>平成30年度に寄託を受けた大久保護之丞関係資料について、調査研究の成果を『調査研究報告』で公表した。</li> </ul> <p>【歴民】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>個人寄贈予定資料の写真や資料の見直しを進めるなか、昭和初期の満州国皇帝来日に際して行われた鯛網見学写真等の存在を確認した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>長期間預託の状態が続いている資料群があることから、整理計画を作成し、計画的に収蔵手続きを進めていく必要がある。</li> <li>資料整理の過程で得られた知見を、展示や刊行物等で発信していく。</li> <li>令和2年度のテーマ展等で発信していく予定である。約10万点の写真類の再確認作業については、令和2年度に重点的に取り組む。</li> </ul>	
		<p>(3) 既収蔵品に関する調査研究、新たな知見</p> <p>【本館】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>高松松平家博物図譜について、高精細画像を用いた製作技法の検討や類例調査の成果を特別展や展覧会図録、『調査研究報告』で公表した。</li> <li>高松松平家に伝来する「水戸御祭礼図」について、全体の構成や細部の内容を検討し、水戸東照宮や茨城県立歴史館での調査も踏まえ、成果を常設展で発信した。</li> </ul> <p>【歴民】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ボランティアや漁業者とともに、収蔵漁網資料の再確認、作図等の調査を開始した。</li> <li>歴民・本館及び県内にある遭難・漂流資料を調査しまとめて、テーマ展等で発信した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>展示を機会とする収蔵品調査を進め、新たに得られた知見の発信を継続する。</li> <li>地域にある文化資源の掘り起こしに関連して、収蔵品の調査を進め、その情報を地域に還元する。</li> <li>ボランティア、漁業者、職員の日程調整がなかなか難しいが、できるだけ進捗を図っていく。</li> </ul>	
		<p>(4) 収蔵品情報の公開</p> <p>【本館】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>館のホームページ上で、データベース情報の公開を継続。</li> <li>新たに収蔵した作品（石井馨堂「堆朱硯箱」）を文化会館で展示した。</li> </ul> <p>【歴民】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>館データベースシステムへの国重要有形民俗文化財約500点の情報入力を行った。</li> <li>当館職員やボランティアが記録してきた祭礼・民俗芸能関係の2次資料である映像を編集し、本館特別展「祭礼百態」で公開した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>新規収蔵資料の館データベースへの登録が遅れているため、計画的にデータ入力を進める。</li> <li>新規収蔵品を積極的に展示等で公開する機会を設ける。</li> <li>今後もボランティアとの協働により、計画的に記録映像の公開を進めていく必要がある。</li> </ul>	

自ら主体的に関わる文化芸術活動の推進	芸術と県民をつなぐ	3. 創作活動発表の場の提供	<p>(1) 香川県美術展覧会応募者数 (前年比)</p> <p>応募総数 1,139点 (前年度 1,265点)</p> <p>絵画 (日本画) 83点 (前年度 91点)</p> <p>絵画 (洋画) 211点 (前年度 241点)</p> <p>彫刻 (立体表現) 21点 (前年度 18点)</p> <p>工芸 59点 (前年度 83点)</p> <p>書 455点 (前年度 479点)</p> <p>写真 310点 (前年度 353点)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・応募数が全体で前年度より126点減となり、昨年度は30点減だったことを考えても、減少傾向が加速している。新規応募者の開拓が急務である。</li> </ul>
			<p>(2) 香川県美術展覧会における若手作家参加件数</p> <p>高校生の出品 37人 (前年度 37人)</p> <p>高校生の入選 7人 (前年度 5人)</p> <p>40歳以下の参加者 104人 (前年度 116人)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高校生の出品は前年度と同数で減ってはいないものの、40歳以下の参加者は減少が続いている。高校卒業後も県展への出品を促す取り組みが必要。高校だけでなく、県内の大学への広報にも力を入れていく。</li> </ul>
			<p>(3) 香川県美術展覧会における若手作家参加促進</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・これまでの県展のイメージを変える試みとして、募集要項のデザインを一新した。</li> <li>・部門の名称を一部変更、出品規定を見直し、多様な表現を受け入れ、若手作家の参加促進をめざした。</li> <li>・若手作家の参加人数は増えなかったが、電気を使用した作品など、出品規定の改善を反映した今までにない作品の応募があった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・改革により、県展が変わっていることを、幅広い年齢層に周知する必要がある。</li> <li>・多様な表現を受け入れるための改善をさらに進め、若手作家の参加数の増加を目指す。</li> <li>・招待作家の協力を得るなどして、新しい表現を取り入れた作品を参加者・観覧者にアピールする。</li> </ul>
			<p>(4) 香川県美術展覧会の実施・運営の改善状況</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・会期中のギャラリートークの充実、ワークショップの開催、中学生の作品展示など、県展観覧者に県展を楽しんでもらえるように工夫した。</li> <li>・他部門の実行委員による審査の視察、審査内容の公表 (目録・展示会場でのパネル掲示) を行い、審査の透明性を高めるための取り組みを行った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・参加者増、特に若年層の増加をめざし、改善への取り組みを継続する。</li> <li>・アンケートによる参加者の意見の把握を行い、改善の方向性を検証する。</li> <li>・審査の透明性をさらに高める方法を検討する。</li> </ul>
			<p>(5) 貸館機能の促進</p> <p><b>【本館】 創作活動発表関係数/総数 (前年度実績)</b></p> <p>貸館総事業件数 82件 (前年度 93件)</p> <p>利用者数 5,937人 (前年度 9,401人)</p> <p>講堂 2,309人 (前年度 4,076人)</p> <p>研修室 2,077人 (前年度 1,472人)</p> <p><b>【文化会館】 創作活動発表関係数/総数 (前年度実績)</b></p> <p>貸館総事業件数 98件 (前年度 91件)</p> <p>利用者数 22,618人 (前年度 17,726人)</p> <p>県民ギャラリー 18,970人 (前年度 13,053人)</p> <p>芸能ホール・和室 3,648人 (前年度 4,673人)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特別展関連事業との調整が課題であった。</li> <li>・利用者からの問合せは増加しており、優先順位の見極めを徹底し、申込者の迷惑にならないように、貸館利用促進につなげたい。</li> <li>・利用者から、施設の老朽化を指摘されている。</li> </ul>

使命3 香川の魅力を発信し、感動を呼び起こすミュージアム

基本方針	活動目標	重点項目	成果の概要	課題及び改善への取り組み
香川の魅力を発信し、感動を呼び起こす事業の実施	感動を呼び起こす	4. 魅力ある大規模な特別展の開催	<p>(1) 入場者数</p> <p>① 自然に挑む 江戸の超グラフィック 高松松平家博物図譜 18,892人(700人/日) 4/27(土)～5/26(日) 27日間</p> <p>② 祭礼百態—香川・瀬戸内の「風流」 5,108人(165人/日) 8/3(土)～9/7(土) 31日間</p> <p>③ 日本建築の自画像 探求者たちのもの語り 8,842人(119人/日) 9/21(土)～12/15(日) 74日間</p>	<p>① 共催者のNHK高松放送局が特別番組を制作・放送したほか、4K8Kの超高精細映像を展示室で上映するなどの連携効果もあり1日平均の入場者数は約700人で、過去最高を記録するなど、好評を博した。</p> <p>② 地域の保存会や自治会等と一緒に取り組んだ展覧会ということもあり、週末に開催した民俗芸能の実演に合わせての来場が多かった。</p> <p>③ 瀬戸内国際芸術祭の秋会期中の芸術祭パスポートの利用者、外国人の来場者は3つの特別展の中で最も多かった。 開展準備の遅滞により、事前広報や図録刊行が遅れ、入館者数が伸び悩んだ。今後は計画的な事業実施に努めたい。</p>
			<p>(2) 新たな視点の取り組み</p> <p>① 県指定有形文化財の高松松平家博物図譜4種13帖の成立背景等の歴史的視点に加えて、細部まで精緻で実物に迫ろうとする表現など美術的視点を加え、高松松平家博物図譜の魅力を発信した。</p> <p>② 祭礼の道具や歴史資料などの展示に加え、映像や写真も多用し、さらに週末には獅子舞やだんじり子供歌舞伎などの実演を行うことで、香川の祭りを体感できるような動的な展示を試みた。</p> <p>③ 建築に関する設計図・写真などの従来型の展示手法に加え、建築模型や動画の多用、様々な角度からの観覧を可能にするための展示室内の造作など、立体的な展示構成を心がけた。</p>	<p>① 博物図譜の文化財的な価値に加えて、細部の緻密な表現に感動を得たとの感想が多かった。 描かれた動植物について、実物の写真との対比や子どもにわかる仮名づかいでの表示を求める意見が複数あり、今後は自然分野の視点も加えていくことを検討したい。</p> <p>② 県内でも他の地域の祭りを見る機会は少なく、特に実演は好評だった。今後も関連イベントを効果的に実施することで、集客につなげていきたい。</p> <p>③ 約600点という大量の展示資料数となったこともあり、観覧者からは展示趣旨が分かり難いとの意見があった。今後、多数の資料展示を行う展覧会については、細別テーマを設定したり、パネル等により細やかな解説を行うように改善していきたい。</p>
			<p>(3) 会期設定</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>令和元年度は、瀬戸内国際芸術祭2019の春・夏・秋会期に合わせて特別展を開催した。</li> <li>芸術祭会期中は、積極的に夜間開館を実施し、開館時間も通常より30分延長して芸術祭来場者の集客に努めた。</li> </ul>	<p>① 資料保存の関係から約1か月の会期設定に対して延長を求める意見があった。</p> <p>② 直前に開催する県展の会期との関係で、芸術祭の夏会期と2週間程度のズレがあった。</p> <p>③ は、芸術祭秋会期終了後も1ヶ月程度開催したが、芸術祭終了後は入場者数に伸び悩みがみられた。 ・次回芸術祭の開催年度には、今回の実績を踏まえ、会期設定や夜間開館の効果的な実施について検討していく。</p>

			<p>(4) 大規模イベントとの連携</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>3つの大規模な特別展を瀬戸内国際芸術祭2019公式プログラムの一つとして位置づけ、同芸術祭とタイアップした集客に努めた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>瀬戸内国際芸術祭のパスポート利用者、外国人の観覧者ともに、これまでの芸術祭開催時より多く、タイアップは有効であり、芸術祭来場者に香川の魅力を発信できたと考えられる。同芸術祭の次期開催（令和4年度）も継続するとともに、更なる充実を図っていく。</li> </ul>
			<p>(5) 展示タイトル、キャッチコピーの工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>館内外から意見を聞きながら、各展ともに展示内容を反映した魅力的なタイトル等を設定することを心がけた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>③に関しては、「日本建築」という用語が漠然として分かりづらいとの意見があった。今後とも、展覧会内容に則した簡潔なタイトル、キャッチコピーを設定し、誘客に努めたい。</li> </ul>
			<p>(6) 観覧者が自分自身で考えたり感じたり出来るような展示手法等の工夫</p> <p>①展示の中心となる博物図譜は、画帖形式のため単調で平面的な展示とならないよう、壁ケースのガラス面に図譜の中の画像を貼り付けるなど演出をした。 博物図譜を共催者のNHK高松放送局が制作した4K8Kの超高精細映像を会場で上映し、細部まで鑑賞できるようにした。</p> <p>②香川の祭礼の特徴である太鼓台や全国一の数を誇ると言われる獅子舞、奴行列などの多彩な資料を展示室だけでなくロビーやエントランスホールまで使って迫力ある展示を心がけ、香川の祭礼の多様性を示すことを目指した。</p> <p>③建築という屋外物を対象としているため、関連イベントでは周辺を歩きながら建築の解説を行うガイドツアーを実施し、実物のスケールや細部の様式を実感してもらえるようにした。</p>	<p>①来館者からは、ケース内の照明の工夫や、描かれた魚類や植物の名称などについて解説の充実を求める声も聞かれた。今後の展示において改善したい。</p> <p>②香川の祭礼の多様性は感じてもらったが、県外の来場者から、県内の固有地名や場所がわからなかったという意見があった。今後は、地図などを用いて、県外からの観覧者にもわかりやすく、実際の祭礼を見に行くことにつながるような解説の方法を検討したい。</p> <p>③ガイドツアー等の行事により県内に現存する建築に関しては理解が深まったが、展示対象となった全国各地の建築について、場所、現存及び非現存など見学方法の説明が必要との意見が寄せられた。</p>
			<p>(7) ミュージアム収蔵品の展示への活用状況</p> <p>①収蔵する高松松平家博物図譜を初めて一度に全帖公開した。</p> <p>②大型の民俗資料である太鼓台など、通常の常設展で公開することができない収蔵品を展示公開することができた。</p> <p>③建築に関する写真、メモ等を中心とした関係資料をパネル、スライドショー等で多く展示するように努めた。</p>	<p>①会場や会期の制約から、全画面公開は出来ていない。博物図譜については要望も多いことから、資料の適切な保存に留意しつつ、今後も積極的に公開していく。</p> <p>②今回の展覧会で民俗資料への関心の高さがうかがえたため、今後も展覧会を企画していきたい。</p> <p>③これらは単体での展示が困難なため、今後も特別展等の機会を利用して、積極的に公開していきたい。今回の展覧会開催によって収蔵につながった資料もあり、今後の活用を考えていきたい。</p>

		<p>(8) ミュージアム収蔵品に対する独自の視点や地域に根差した題材を基にした展示企画</p> <p>①地元香川に伝来する高松松平家の博物図譜をメインにして展示を行った。</p> <p>②太鼓台やだんじりなどの大型資料の輸送や展示、獅子舞や奴などの実演について、保存会や青年団など地元の人々の全面的な協力を得て展覧会を開催することができた。 香川を中心とした瀬戸内の多様な祭礼について地域性に留意して、祭礼で使用する衣装や道具を、写真や映像を多数交えて紹介した。</p> <p>③サブテーマとして、「地域」「風土」「コミュニティ」を設けて、主に瀬戸内を中心にこれらと建築の関わりを紹介した。</p>	<p>①観覧者から「県民として誇らしい」という感想もあり、香川の歴史・文化を県内外にアピールすることができた。</p> <p>②地元の人々にも県内の身近な祭礼について、深く知ってもらえる機会になった。 香川・瀬戸内の祭礼の多様性に加え、少子高齢化等の変容する地域社会において、今後の祭礼や民俗芸能の継承についても考える契機となった。</p> <p>③民家や町並みなど、何気ない地域の建築を取り上げることで、地域の成り立ちを再発見したとの感想を得た。今後ともこのような地域に関する展示を継続して実施する。</p> <p>・令和元年度の特別展は、瀬戸内国際芸術祭の来場者に香川・瀬戸内の魅力を伝えることを意識し、地域に根ざしたテーマの展示を開催することが出来た。今後もこのような企画を継続していくため、調査研究や資料収集の成果を展示に還元する流れを意識して事業を計画していきたい。</p>
		<p>(9) 広報戦略・方法、SNSやHPなどによる情報発信の状況</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・駅や新聞等の紙媒体の広告に加えて、瀬戸内国際芸術祭会場及び交通アクセスポイントに広告を掲出し、同芸術祭来場者の誘客に努めた。</li> <li>・展覧会情報を中心にHPの更新を心がけるとともに、SNSについては新たにフェイスブックのアカウントを開設し、幅広い世代に情報発信を行った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会全体として従来型の紙媒体の広告は縮小傾向にあることから、今後は美術・博物館系のサイト等の専門的な広告や、SNSを活用した情報発信に移行していく必要がある。</li> </ul>
収蔵品により香川の魅力を呼び起こす	5. 常設展示における収蔵品の活用	<p>(1) 常設展示の回数と入場者数（前年比） 13回 51,492人（14回 46,462人）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・令和元年度は特別展を3回開催したこともあり、常設展についても入場者が前年比で増加した。</li> </ul>
		<p>(2) テーマ設定</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「水戸東照宮祭礼の世界」（夏季）、「建築家たちの見た風景」（秋季）など特別展に関連する展示や、特別展「第66回日本伝統工芸展」に合わせて、新しく香川県指定有形文化財に指定された玉椿象谷の漆芸作品3点を特別公開するなど、館全体として一体性のある展示を心がけた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・収蔵品の調査研究の成果を公表し、収蔵品を公開する場である常設展示を積極的に活用し、テーマ設定を工夫することによりリピーターの確保に努める。</li> </ul>

		<p>(3) 展示に係る工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「建築家たちの見た風景」は、建築家が遺した膨大な写真を紹介するため、複数のプロジェクターを使用し、展示手法を工夫した。</li> <li>・アート・コレクション「絵画と文字×比喩と象徴」では、絵画・書・漆芸という異分野の作品を比喩的な絵画表現として関連付けて紹介した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・当館の特徴である歴史系と美術系を融合した魅力ある常設展を企画していく。</li> <li>・展示品に応じた見せ方を工夫し、ノウハウを共有・蓄積していくことにより、特別展で応用するなど職員全体のスキルアップをはかっていきたい。</li> </ul>
		<p>(4) 広報戦略・方法、SNSやHPなどによる情報発信の状況</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・特別展広報と同時に実施することで、経済的・効果的な情報発信に努めた。また、従来から利用しているツイッターに加えて、新たにフェイスブックのアカウントを取得した。</li> <li>・年度末の新型コロナウイルス感染症拡大の影響による学校休業期間には、常設展示の情報を動画で積極的に配信した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・フェイスブックやツイッターなどSNSは種類により利用者世代が異なるため、複数のSNSを利用した効果的な情報発信を行っていきたい。</li> </ul>
観覧者の満足度を向上させる館内環境の実現	6. ミュージアムの機能強化に向けた総合的リニューアルの検討	<p>(1) 検討状況</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・検討課題として下記の項目をあげている。</li> <li>(1) 学びの場としての展示室の検討</li> <li>(2) 美術作品展示スペースの確保</li> <li>(3) 来館者の安全性と利便性向上</li> <li>(4) 障害者や高齢者等への対応</li> <li>(5) 県民の恒常的空間としてのエントランス、ロビーの無料スペースの活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・県の財政状況も睨みながら総合的リニューアルの実施に向けて具体的な検討を継続して行っていきたい。</li> <li>・項目の(1)や(5)について、現状で出来る範囲で試行していくことを考えたい。</li> </ul>
		<p>(2) 緊急を要する部分への対応</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・歴史展示室の不具合が生じていた映像機器を更新した。</li> <li>・講堂等の吊り物設備（ワイヤーロープ）について、利用者の安全確保のため修繕を行った。</li> <li>・空調設備について部分的な修繕を行った。</li> <li>・展示室のクロス貼替や照明のLED化等の来館者サービスの面から展示機能の維持・強化が早急に必要部分について、予算要求したが、認められなかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・開館後20年が経過しているため、館内設備の老朽化が著しいが、緊急を要する箇所については予算要求を行い、早期の修繕・整備を行っていきたい。</li> </ul>
観覧者の満足度を向上させる館内環境の実現	7. 瀬戸内海歴史民俗資料館の活用	<p>(1) 収蔵品を活用した展示の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・テーマ展等とは別に、中央ホールや休憩コーナーなど館内3カ所の展示ケース等を利用して、3~4ヵ月ごとに収蔵資料を展示替えるなどして活用した。</li> <li>・歴民が継続的に調査研究、収蔵してきたテーマ・資料を核にして、本館特別展「祭礼百態」を実施した(別掲)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・令和2年度以降も継続的に実施するとともに、ホームページ等でも紹介していく必要がある。</li> <li>・今後も数年に一度の頻度で、歴民の資料や研究蓄積を活用した特別展を本館で企画開催していく必要がある。</li> </ul>



			<p>(2) 展示方法の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・テーマ展の開催にあたり、外部の助成金などを活用し開催した。</li> <li>・職員の人脈を生かし、県内在住のイラストレーターの協力を得て、子どもたちにも理解しやすいようなイラストを用いた展示パネルの製作や解説シートづくりを行った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今後も県費、外部資金に限らず、事業費の確保に努める必要がある。</li> <li>・今後も子どもたちにも分かりやすいパネルや解説、外国人対応の多言語化を検討していく必要がある。</li> </ul>
			<p>(3) 自然・環境分野の研究者との協働による展示および教育現場へのアプローチ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・テーマ展として、県みどり保全課と共催で「まちかど生き物標本展」(巡回)を初めて実施し、NPOとも協働しながら昆虫展示を行い、新たな客層の開拓や自然分野の研究者との連携を試みた。</li> <li>・同じくテーマ展として、県高校理化・生地部会と協働し、高校の理科室等に保管されている、理科教育史上大切な実験器具や標本を、教育現場の理科教員と連携して展示を行った。</li> <li>・当館展示室の民俗資料や取り上げているテーマに関連し、県内の自然分野の識者と意見交換しながら、自然分野視点からの常設展示解説シートを5種作成し設置した。</li> <li>・当館水産関係再任用職員の知見を活かし、展示室で取り上げている魚や漁具に関連した解説シートを3種作成し設置した。</li> <li>・県環境管理課と連携し、同課が推進する「里海大学」の講座に協力した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・順次、さまざまな生き物へと対象を広げたり、複数年にわたり継続実施し、自然・環境分野との連携や融合、効果的な当館の常設展示への取り込みなどを模索していく必要がある。</li> <li>・文化財レスキュー的観点で、散逸傾向にある各高校に保存されている実験器具や標本に光を当て、保存に向けての啓発を行うことができた。今後も学校現場との発展的な連携を深めていく必要がある。</li> <li>・令和2年度も継続的に、自然・環境分野視点からの解説を充実させる予定である。</li> <li>・今後は、地元の魚食文化について紹介するパネル等の作成にも着手する予定である。</li> <li>・今後も連携を継続していく予定である。</li> </ul>
			<p>(4) 施設・設備の修繕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・機械室屋上の防水工事を実施した。</li> <li>・個人の寄付金を利用して、敷地内の赤燈台などの再塗装を行った。</li> <li>・また、個別展示ケースの照明改善を行った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・令和2年度も引き続き、機械室空調設備や第1展示室特定天井の改修工事を実施予定である。</li> <li>・順次、来館者の安心・安全にかかる施設・設備の修繕等から優先的に要望し、続いて利便性の向上等についても修繕要望をしていく予定である。</li> </ul>
			<p>(5) 収蔵スペースの検討と対策</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・慢性的な収蔵スペース不足の解消や屋外に仮置きしている船舶の収蔵方法等について、検討を継続している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・令和2年度以降は、既存収蔵庫の収蔵資料の確認調査とあわせて、収蔵方法等の工夫を行い、スペースの確保に努める予定である。</li> <li>・今後は、県有未利用施設の状況をふまえ対策を検討していく必要がある。</li> </ul>